

令和四年度

渋谷教育学園渋谷中学校 入学試験問題

国語

※ 解答は、必ず解答用紙の指定されたところに記入しなさい。

※ 「〇〇字で」、または「〇〇字以内で」、という指示がある場合は、「。」「、」「
「かつこ」なども一字と数えます。

※ 「〇〇字で」、または「〇〇字以内で」、という指示がある場合は、「。」「、」「かつこ」なども一字と数えます。

□ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

【一九六一年、アメリカ人のリリー（リリアン・ダイアー）は父の仕事の都合でテキサスから台湾に引っ越した。必ず手紙を送ると言っていた仲良しだった女子たちからは何の連絡もなく、台湾の米軍基地の中にある新しい学校（台湾に住むアメリカ人の子どもたちが通っている）ではクラスメイトたちから孤立している。この日も学校の昼休みの時間に、クラスメイトの女子たちが台湾の人々を見下すような発言をしたのに対してリリーが反論したところ、リリーはからかわれてひどい悪口を言われた。】

ママが台所に入ってきて、そつとリリーの髪の毛をなでた。「学校はどうだった？」

両親には学校で起こったことを決して知らせてはいけなさとリリーにはわかっていった。ふたりは救いの手を差しのべようとするだろう。そんなことになればますます事態が悪化するだけだ。

「良かったよ」リリーは言った。「女の子たちとだんだん知り合いになれてきた」

ママはうなずき、リビングに戻った。

リリーは自分の部屋にいきたくなかった。テキサスから持ってきた『少女探偵ナンシー・ドルー』のシリーズを全部読み終わってからは、ほかに部屋でやることがなかった。また、台所にも留まっていたくなかった。そこでは林阿媽が料理を作っており、片言の英語で話しかけてこうとするからだ。リリーは、林阿媽と彼女の作った貢丸に腹

を立てていた。身勝手なのはわかってはいたけれど、どうしても腹が立ってしかたなかった。(1) 家から出ていきなかった。

この日はやいうちに降った雨が湿った亜熱帯の空気を冷やしていた。リリーは歩きながら軽やかなそよ風を味わった。登校用に結っていたポニーテールから赤い巻き毛をふりほどいた。ライトブルーのタクトップと黄褐色の短パン姿で、快適だった。ダイアー家が①カリテいる小さな中国様式の農家の西に村の水田が基盤の目状に広がっている。数頭の水牛が泥たまりでのんびりしており、長い曲がった角で背中のざらざらの黒い皮をそつと引っ掻いていた。故郷のテキサスで見慣れていた、長くて細い角が危険なほど前に向かって曲がっている長角牛とちがって、水牛の角はうしろに向かって曲がっており、背中を搔くのにうってつけたった。

いちばん身体が大きくて最年長の水牛は目をつむり、水のなかに半分沈んでいた。

リリーは息を殺した。(2) その水牛に乗ってみたかった。

まだ自分が幼いころ、パパが新しい仕事——なにをしているのか話せないほど秘密の仕事だった——を手に入れるまえ、リリーはカウガールになりました。友だちが羨ましかった。彼らの親は東部出身ではなく、馬の乗り方、車の運転方法、牧場の仕事のやり方を知っていた。リリーは郡のロデオ大会に足繁く通い、五歳のとき、ママのキヨカをもらってると登録テーブルにいた男性に伝えて、羊乗り競争に参加した。

リリーは乗り手を振り落とそうとして跳ねる羊にわくわくどきどきしながら、なんと二十八秒間しがみついた。郡中を驚愕させた記録だった。リリーが鍔の広いカウボーイハットをかぶり、堅く結んだポニーテールをうしろに跳ね上げさせた写真があらゆる新聞に掲載され

た。その写真のなかの幼い少女の顔にはいっさい恐怖心が表れておらず、歓喜と強い意志だけが浮かんでいた。

「怖いもの知らずのバカね」ママが言った。「いったいどうしてあんなことをしたの？ 首の骨を折りかねなかったのに」

リリーはママに返事をしなかった。そのあと何カ月もそのときの羊乗りのことを夢に見つづけた。あと一秒いがみつぐんだ、と羊の背に乗っているとき、自分に言い聞かせた。必死にしがみつけ。その二十八秒間、リリーは、習字帳やおつかいやあしなさいこうしなさいと命じられることだらけのただの幼い少女ではなくなっていた。彼女の人生には明白な目的があり、それを成し遂げるためのはつきりとした方法があった。

もしリリーの年齢がもう少し上だったら、その感覚を“自由”と表現したかもしれない。

いま、もしあの年老いた水牛にまたがることができたら、ひよっとするとあの感覚を取り戻し、そのあとで問題なく日々を送れるようになるかもしれない。

リリーは浅い泥たまりに向かって駆けた。どうやら年老いた水牛は食い戻したものをまだはんでいた。リリーは泥たまりの端にたどり着き、水牛の背に向かって跳躍した。

リリーは柔らかいドサツという音とともに水牛の背中に着地し、水牛が一瞬沈みこんだ。リリーは跳ね上げや前のめりがやってくるのに備え、長くて曲がっている角から目を離さず、もし水牛が角を使っ
て自分を払い落とそうとしたら掴む用意をしていた。アドレナリンが分泌されて身体
のなかをどつと走り回り、リリーは必死にしがみつく心構えをした。

ところが、年老いた水牛は昼寝を邪魔されて、たんに目をあけると、鼻を鳴らしただけだった。首をひねり、左目で咎めるようにリリーを見つめた。不満気に首を振ると、起き上がり、のたのたと泥たまりから出ようとした。水牛の背中にまたがっているのは、なめらかで安定していた。幼いころよくパパはリリーに肩車をしてくれたが、そのときと似ていた。

(3) リリーは苦笑いをした。水牛の首の付け根を謝るように軽く叩いた。

リリーは力をゆるめて座り、水牛に自由に歩ませるようにして、通り過ぎていく稲穂の畝を眺めた。水牛は田んぼの端にたどり着いた。そこには小さな木立があり、水牛はその向こうにまわりこんだ。そこで地面は川岸に向かって下っており、水牛はそちらに向かった。リリーと同年代の中国人の少年たちが三、四人、川で遊んでいた。家で飼っている水牛を洗ったりしていた。リリーと年老いた水牛が子どもたちに近づいていくと、少年たちの笑い声が止み、ひとりまたひとり、振り向いてリリーを見た。

リリーは不安になった。男の子たちにうなずいて、手を振った。彼らは手を振り返さなかった。リリーにはわかった。子どもならだれしもわかる方法で、自分が面倒に巻きこまれるのだ、とわかった。

ふいになにか濡れて重たいものがリリーの顔にぶつかった。男の子のひとりが川の泥をつかんで、投げつけたのだ。

「鼻デカ、鼻デカ、鼻デカ！」少年たちは口々に叫んだ。さらなる泥がリリーに向かって飛んできた。泥はリリーの顔といい、腕といい、首といい、胸といい、あらゆるところにぶつかった。リリーは彼らがなんと叫んでいるのかわからなかったが、彼らの声に含まれる敵意と歓喜は翻訳する必要がなかった。泥が入って目がズキズキした。涙

が止まらなくなった。リリーは両腕で顔を覆い、泣き声を聞かれて少年たちを満足させることはしまいと心に決めた。

「痛っ！」思わず悲鳴が上がった。石が肩にぶつかり、さらなる石が太ももに当たったのだ。リリーは水牛の背中から転げ落ち、うずくまって水牛のうしろに隠れようとしたが、少年たちはますます声高に囀り立て、水牛をまわりこんでリリーをいじめようとした。リリーはまわりの泥を両手いっぱいにつかんで、闇雲に、腹立ち紛れに、必死になって少年たちに投げつけたのだ。

「猴囃子、快走、快走！」威厳に充ちた老人の声が聞こえた。泥の雨が止まった。リリーは袖で顔の泥をぬぐい、顔を起こした。少年たちは走って逃げていった。老人の声がさらに彼らに向かって投じられ、子どもたちは走る速度を増した。少年たちの水牛がもつとのんびりした足取りで飼主たちを追った。

リリーは立ち上がり、年老いた水牛のまわりを見回した。年かさの中国人男性が少し離れたところに立っていて、リリーに優しくほほ笑んでいた。老人のうしろにはリリーと同年くらいの少年がひとり立っていた。リリーが見ていると、少年は逃げていく男の子たちの急速に小さくなっていく姿に向かって小石を一個投げた。その投擲は強力で、小石は宙高くアーチを描くと、最後尾の少年が低木の木立をまわりこんで姿を消す直前に、そのまうしろに落下した。石を投げた少年はリリーに向かってやと笑い、乱ぐい歯を覗かせた。

「お嬢ちゃん」老人が訛りはあるが、明晰な英語で話しかけた。「大丈夫かね？」

リリーは自分を救ってくれた人たちを声もなくまじまじと見つめた。「阿黄となにしてたんだい？」少年が訊ねた。年老いた水牛がのっそり彼に近づいていき、少年は手を伸ばして、牛の鼻面を軽く叩い

てやった。

「あの……えっと……背中に乗ってたの」リリーの喉はからからだった。ごくりと唾を飲む。「ごめんなさい」

「悪い子たちじゃないんだが」老人は言った。「ほんの少しやんちゃで、よそ者を信用してないだけなのだよ。教師として、もっと行儀良くするよう教えなかったのは、わしの責任だ。あの子たちになりかわって、この通り謝る。すまぬ」老人はリリーに頭を下げた。

リリーはおっかなびっくり頭を下げ返した。身を屈めると、上と下が泥だらけになっているのが見え、石が当たった肩や脚がずきずきうずいているのに気づいた。ママに大目玉を食らうだろう。——それは確実だった。頭のとっぺんから爪先まで泥に覆われて、どんな格好で母親のまえに姿を現すことになるのか、目に浮かぶようだった。

(4) リリーはこんなにもひとりぼっちだと感じたことはなかった。

「少し綺麗になる手伝いをさせてくれんかな」老人が申し出た。一行は川のはとりに歩いていき、老人はハンカチを使ってリリーの顔から泥を拭き取り、川の澄んだ水でハンカチをすすいだ。老人の手つきは優しいものだった。

「わしは甘振華、こいつは孫の陳 恰 風だ」

「ティと呼んでくれてもいいぜ」少年が付け加えた。老人は喉を鳴らして笑った。

「はじめまして」リリーは言った。「リリアン・ダイアーです」

「それでなにを教えるの？」

「習字だ。ひどい悪筆で先祖や彷徨える霊を含むだれもかれもを震え上がらせないよう、あの子どもたちに筆で漢字を書けるよう教えておる」リリーは笑い声をあげた。甘さんはいままではあったどの中国人と

もちがっていた。だが、彼女の笑い声は長くつづかなかった。学校の
ことがいつも頭のどこかにこびりついており、あしたのことを考えて、
リリーは眉間に皺を寄せた。

甘さんは気づかないふりをした。「だけど、ちょっとした魔法も使
うんだよ」

その言葉にリリーは興味を惹かれた。「どんな魔法？」

「わしは測字先生(文字占い師)なのだ」

「って、なに？」

「爺ちゃんは、名前のなかの漢字や自分で選んだ漢字に基づいて、人
の運勢を占うんだ」

テディが説明した。

リリーは霧でできた壁に足を踏み入れた気がした。わけがわからず、
甘さんを見る。

「中国人は神託を受ける③ホジヨ手段として書を発明した。そのため、
漢字はつねに深淵な魔法を宿しているのだよ。漢字から、人々の悩み
や、過去と未来に待ち受けているものをわしは言い当てることができ
る。ほら、見せてあげよう。なにか単語をひとつ思い浮かべてごらん、
どんな単語でもいい」

リリーはあたりを見まわした。三人は川岸の岩の上に座っており、
木々の葉が金色や赤色に紅葉しはじめていて、稲穂がどっしり撓んで
収穫間近になっているのがリリーの目に入った。

「秋」と、リリーは言った。

甘さんは棒を手に取り、足下の柔らかな泥に漢字を一字書いた。

秋

「泥に棒で書いたのでへたくそな字になっているのはかんべんしく

れよ。紙も筆もないのでな。この漢字は、シュウという字で、中国語
で“秋”を意味する」

「これからあたしの運勢がどうやってわかるの？」

「そうだな、まずこの漢字をばらばらにして、戻す必要がある。漢字
というのはほかの漢字を合わせて作られているんだよ、積み木のように
な。“秋”はふたつのべつの漢字からできている。この漢字の左側
の部分は、ヒエという漢字で、“キビ”や“米”や“穀物一般”を意
味する。いまここに見える部分は、様式化されているのだけど、大昔
には、この文字はこんなふうに書かれていたのだ」

甘さんは泥に書いた。

禾

「ほら、茎が熟れた穂の重みで撓んでいるように見えるだろ？」

リリーは心を奪われて、うなずいた。

「さて、シュウの右側はべつの漢字、フォアで、火を意味する。燃え
ている炎みたいだろ、火花が飛んでいる？」

火

「わしが生まれた中国の北部では、米はできないんだ。そのかわりに、
キビや小麦やモロコシを育てておる。秋になり、収穫して脱穀し終わ
ると、畑に藁を積み上げて、燃やし、灰が翌年の畑の肥やしになるよ
うにする。金色の藁と赤い炎、そのふたつを合わせて、シュウ、秋が
できるのだ」

リリーはうなずき、その光景を思い描いた。

「だが、きみが自分の漢字としてシュウを選んだことでわしになにか
わかるかといえば」甘さんはしばらく黙って考えた。そしてシュウの

字の下にさらに数本の線を引いた。

愁

「さて、シユウの下に心を表す漢字シンを書いた。これはきみの心の形を表す文字だ。ふたつの字を合わせると、新しい漢字チヨウがでる。これは、^{うれ}“愁い”や^{しみ}“悲しみ”を表す文字だ」

(5) リリィは心臓がキュンと締め付けられる気がして、突然にもかもぼやけて見えた。リリィは固唾^{かたず}を飲んだ。

「きみの心にはたくさん悲しみがあるんだね、リリィ、たくさん心配事がある。きみをとて、とっても悲しくさせていることがある」

リリィは老人の柔和^{にやわ}で皺^{しわ}の寄った顔を見上げた。端正^{たんせい}に整えられた白髪を見る。リリィは老人に近づいていった。甘さんは両腕をひろげ、リリィはそつと優しく抱き締めてくれる相手の胸に顔をうずめた。

泣きながらリリィは甘さんに学校での出来事を話した。ほかの女の子たちや彼女たちの囁^{はさや}声のことを、友だちからの手紙が届かない食卓^{しょくたく}のことを。

「喧嘩^{けんか}のやり方を教えようか」リリィが話し終えると、テディが言った。「思い切りぶん殴^{なぐ}ってやれば、もうちょっかい出してこないよ」

リリィは首を横に振った。男の子は単純だ。拳^{こぶし}で言うことをきかせることができる。女の子たちのあいだの魔法の言葉はもつと④^④ブクザツ^④だった。

(ケン・リュウ「文字占い師」より)

※林阿媽：リリィの家のお手伝いさん。この日の昼休みに、彼女が作ってくれた貢丸(肉団子)を食べていたリリィはクラスメイトにからかわれた。

The Literomancer (from “The Paper Menagerie and Other Stories”) by

Ken Liu

Copyright©2016 by Ken Liu

Excerpted in Japanese by the permission of Baror International, Inc.
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

問一 〓線①②④のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は一画ずつていねいに書くこと。

問二 〓線①「家から出ていきなかった」とありますが、ここでのリリィの説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学校で起きたことを話すとますます状況^{じょうきょう}が悪化しそうでママには本当のことが言えないし、林阿媽を責めるのはお門^{かじり}違いだと分かっていても苛^{いら}立ちを感じてしまうので彼女とも話をしたくないし、自分の部屋にいてもすることがないので、家にはいたくないと感じている。

イ 学校での状況をママに知られると事態が悪化するのを目に見えていいるし、何も知らないうえに英語があまり話せない林阿媽と話をするのももどかしいし、自分の部屋にはテキサスを思い出させるものしかないので、家にいるのがいたたまれないと感じている。

ウ 学校で起きたことを思い出したくないのでママとはこれ以上話したくないし、林阿媽の料理のせいでトラブルが起きたことが腹立たしいがそれを彼女に説明するのはめんどろなことだし、自分の部屋には楽しめるものが何もないので、家にも仕方ないと感じている。

エ 学校で起きたことにママが口を出すと余計にややこしいこと

になりそうでママには話せないし、英語ができない林阿媽に彼女が悪いわけではないと伝えるのは自分には難しくもどかしいし、自分の部屋にいても仕方がないので、早く外に出たいと感じている。

オ 学校でのことを話すとうそがばれてしまいそうなのでママと顔を合わせたくないし、林阿媽を見ていると今日の出来事への怒りがこみあげてくるので彼女とも話をしたくないし、自分の部屋には気がまぎれるものがないので、家は自分のいるべき場所ではないと感じている。

問三 — 線(2)「その水牛に乗ってみたかった」とありますが、リリーがそのように思ったのはなぜですか。六十一字以上七十字以内で説明しなさい。

問四 — 線(3)「リリーは苦笑いをした」とありますが、それはなぜですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 昔乗ったことのある羊よりもずっと大きい水牛を前に、振り落とされないように神経を研ぎ澄ませていたのに、水牛があまりに無反応で、ロデオの乗り手としての自分の感覚が鈍ってしまったと感じて戸惑ったから。

イ 目の前の水牛はテキサスの水牛とは違って角が後ろを向いていていっそう危険であり、その角から目を離さないよう気をつけて乗ったのに、なぜか父の肩車が思い出され逆に安心してしまったのがおかしかったから。

ウ うまくいけば昔の楽しかった瞬間を思い出せるかもしれないと必死に水牛にしがみついたのに、昼寝をしていた水牛はピクリとも動かず、期待していたようなことは何も起こらな

くてがっかりしたから。

エ 大きな水牛に振り落とされまいと懸命にしがみつこうとしたのに、水牛の背中には思いのほか安定していて拍子抜けしてしまい、力みすぎていたさつきまでの自分を滑稽に感じたから。

オ 一番体が大きい水牛を警戒して興奮状態にあったのに、水牛は危険を感じさせるどころか思いどおりに動いてくれて、必死になっていたさつきまでの自分を愚かしく感じたから。

問五 — 線(4)「リリーはこんなにもひとりぼっちだと感じたことはなかった」とありますが、ここでのリリーの説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア アメリカの友達からは手紙一つ無くさみしく感じていたところに、学校でクラスメイトから嫌がらせを受けた。自分を心配する母にそのことを話すのは気が引けて家を出たのに、現地の子どもたちからさらにひどい嫌がらせを受け、母を余計に心配させることになってしまった。言い訳をしても母が分かってくれるとは考えにくく、一番の理解者であるはずの母に悩みを打ち明けられず孤独感を深めている。

イ アメリカの友達からは手紙一つ無くさみしく感じていたところに、学校でクラスメイトから嫌がらせを受けた。そのことを母にもお手伝いさんにも相談できず家を出たのに、現地の子どもたちとのトラブルに巻き込まれてしまい、新たな人間関係の悩みを持って家に戻ることになってしまった。事情を知らない母が怒るのは明らかであり、誰にも悩みを共有できない苦しみを一人では抱えきれなくなっている。

ウ アメリカの友達からは手紙一つ無くさみしく感じていたところに、学校でクラスメイトから嫌がらせを受けた。そのこと

を母に話すのも面倒で家を出たのに、現地の子どもたちからいじめられ、さらに面倒なことに巻き込まれてしまった。どのみち母と話さざるを得なくなってしまうたうえに怒られるのは目に見えており、なぜ自分一人がこんな思いをしなればならないのかとひどく落胆らくたんしている。

エ アメリカの友達からは手紙一つ無くさみしく感じていたところに、学校でクラスメイトから嫌がらせを受けた。母にさえそのことを話さなくて家を出たのに、現地の子どもたちからひどい目にあわされ、結局みじめな姿を母に見せることになってしまった。事情をよく分かってもらえないまま母に怒られるのは予想がつき、誰も自分のことを受け入れてくれない現実にかつてない疎外感そがいかんを覚えている。

オ アメリカの友達からは手紙一つ無くさみしく感じていたところに、学校でクラスメイトから嫌がらせを受けた。そのことを母に聞かれるのが嫌で家を出たのに、現地の子どもたちから暴力を振るふるわれ、家に帰ることになってしまった。母は事情を聞きもせず怒り出すに違いなく、降りかかる様々な困難こんくわんを克服こくふくしていくために頼れるのは自分一人しかいないと、今まで味わったことのない孤立感たを抱いている。

問六 — 線(5)「リリーは心臓がキュンと締め付けられる気がして、突然なにもかもぼやけて見えた」とありますが、文字占いを聞きはじめて時点からここまでのリリーの変化を説明したものとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 占いの前は、母や学校のことが気になって仕方なかった。文字占いについて興味を抱き、説明を聞きはじめたときは今一

つ理解に苦しんだが、実際に単語を選んでその漢字の説明を聞いているうちにその世界観のとりこになっていった。占いの中でたまたま選んだ「秋」という言葉から、甘さんが「愁」という漢字をみちびき出したことで、初めて自分の悲しい気持ちに気づかされ、にわかに目から涙がこぼれた。

イ 占いの前は、クラスでのことを気に病んでいた。文字占いについて興味を抱き、説明を聞きはじめたときは楽しかったが、実際に単語を選んでその漢字の説明を聞いているうちに不思議な気分おそに襲おそわれた。占いの中で「愁」という「悲しみ」を表す文字が登場したことで、甘さんが自分の気持ちを察して寄り添よそおうとしてくれていることに気が付き、喜びと気恥きはずかしさから急に甘さんの顔を見返すことができなくなった。

ウ 占いの前は、明日の学校のことで頭がいっぱいだった。文字占いについて興味を抱き、説明を聞きはじめたときは余計なこととは忘れて不思議な文字占いに夢中になっていた。実際に単語を選んでその漢字の説明を聞いているうちに想像がふくらみ、美しい光景を思い浮うかべた。占いの中で出てきた「愁」という文字が自分のつらい状況を言い当てていることを知り、いきなり厳しい現実を突つきつけられた気がして、目の前が真っ暗になった。

エ 占いの前は、母や学校についての心配事が頭の隅すみから離れないでいた。文字占いについて興味を抱き、説明を聞きはじめたときは占いに疑念を持っていたが、実際に単語を選んでその漢字の説明を聞いているうちに甘さんのことを信頼しんらいするようになっていった。占いの中で「愁い」や「悲しみ」という言葉で自分の気持ちを言い当てられ、甘さんなら自分の気持ちを分かっ

てくれると確信し、安堵感のあまり不意に涙がにじんできた。
オ 占いの前は、学校のことが頭を離れず憂うつになっていた。

文字占いについて興味を抱き、説明を聞きはじめたときは不思議に思っていたが、実際に単語を選んでその漢字の説明を聞いているうちにすっかり夢中になってしまい、甘さんの言葉に引きこまれていった。占いの中で「愁い」や「悲しみ」という言葉が出たことにより、自分の気持ちを言い当てられたようで胸が苦しくなり思いがけず涙があふれてきた。

問七

次のア～オは、この文章を読んだ後、本文について話し合った生徒たちの意見です。このうち本文の解釈として明らかな間違いを含むものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア この場面でのリリーは新しい環境の中でつらい思いをして悲しそうにしていることが多いけれど、本来の彼女は好奇心旺盛でまっすぐな人物だと思う。水牛に乘ろうとする場面や甘さんたちとの会話からそんなことが感じられたよ。

イ 私も海外に住んだことがあるから分かるけれど、故郷のアメリカから遠く離れ、言葉も通じない異国に連れてこられたリリーにとって、英語を話せる身近な人物は家族と学校の友だちだけなのに、その中の誰にも心を開けないでいたのは本当につらかっただろうね。

ウ アメリカ人ではないけれど英語を話すことができ、リリーを受け入れてくれる甘さんが現れたことはリリーにとって大きな救いだね。甘さんとティディ以外の台湾の人々や風物はリリーにとってあまり好ましいものとしては描かれていないもの。

エ 甘さんはとてもミステリアスな人物だよ。この時代の台湾で明晰な英語を話せる老人なんてきっと珍しかったのでは

ないかな。しかも「文字占い」という不思議な技術も持っている。彼の正体を知りたいね。

オ この小説では、「文字」が重要な役割を果たしている。普段当たり前のように漢字を使う私たちとは違って、アメリカ人のリリーにとって、漢字はなじみの薄い不思議な文字のはずだから、その分だけ文字の持つ力に神秘的なものを感じて魅了されたのかもしれないね。

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

(1) 人間の新生児はなぜ未熟な状態で生まれてくるのでしょうか。

たとえば馬は生まれた直後に立ち上がることができます。しかし、人間の新生児は立つことも、一人でもものを食べることもできません。なぜ人間の乳幼児は、周囲の年長者による保護や教育が与えられなければ生きていくことができないという「弱さ」を抱えることになったのでしょうか。

ヒントは「直立歩行に適さない骨格」と「大きな脳」です。

日本でもベストセラーになったユヴァル・ノア・ハラリの『サピエンス全史』でも紹介されている議論ですが、ハラリによると、霊長類の骨格はもともと四足歩行に適したものでした。四足歩行から直立歩行に移行するには腰回り、つまり骨盤を細める必要があります、それによって女性は産道が狭くなりました。

またこのとき、人間は他の動物たちよりもずっと大きな脳を獲得しつつありました。

つまり、人間の赤ちゃんは大きな脳を携えながら、狭くなった産道を通して生まれてこなければならぬという難点を抱えることになったわけです。人間は哺乳類の中で最も難産な種だそうです。

進化はどのようにしてこれを解決したかというと、脳の発達が完了する前の段階、すなわち「頭が大きくなる前の段階で出産する」という道を選びました。それにより母体の生存率と子供の出生率が上がり、自然選択によって人間は早期の出産をするようになりました。

このようにして、人間は未熟な状態で生まれてくることになったわけです。

さて、重要なのはここからです。

出産後、成長途中の未熟な乳幼児を抱えた母親は数年間にわたって食べ物を自身の力で①サイシュウすることができず、子育てを周囲の人間に手伝ってもらわなければならなくなりました。それと同時に、人間のある能力が発達します。

ハラリの言葉を引きます。

人間が子供を育てるには、仲間が力を合わせなければならぬのだ。いたがって、進化は強い社会的絆を結ぶ者を優遇した。

(『サピエンス全史(上)』、22-23頁、強調引用者)

進化のプロセスからすれば、脳の小さい未熟な新生児を産むという解決策ではなく、大人の身体のほうが進化して、直立歩行を可能にしたがらも骨盤を大きくしたり、産道を広くするなどして脳が完成した子供を産めるようにする、という選択肢もありえたはずです。

しかし、②自然はそのような身体的拡張ではなく、社会的能力のほうを選びました。

子育てや互いの生存のための信頼できる仲間。見返りを求めず助け合える関係性。

僕は、僕らが人間となって文字通り立ち上がった瞬間から、つまり、人類の黎明期の一番初めから、「他者からの贈与」「他者への贈与」を前提として生きてゆくことを運命づけられてしまったのです。そして、そのような仕方では僕らはかろうじてこの世界を生き延びてきました。

信頼関係や助け合いは明らかに「サービス」ではありません。ましてや「商品」ではありません。そもそも市場というものが出現する

はるか以前からある人類学的慣習ですから、そのようなタームで語れるはがありません。それらはいわば「お金では買えないもの」です。

「お金で買えないもの」。これはたしかによく耳にする言葉です。

しかし僕が気になるのは、ここに「否定」が入り込んでいることです。

お金で買えないもの、という否定的定義。

たとえば「猫」はたしかに「犬ではないもの」ですが、それで猫が十全に定義され、説明されているわけではもちろんありません。

「猫とは何か？」と問うたときに「犬ではないもののことだ」という答えに満足できる人はいないでしょう。なのに、なぜ「お金で買えないもの」という言い方に僕は満足してしまうのでしょうか？

その言葉によって、何かが言い表された気になるだけで、それがどのようなものであり、どのような効果を僕らにもたらすのかは一向に分かりません。

お金では買えないもの。それは一体何なのでしょう？

僕らが必要としているにもかかわらずお金で買うことのできないものおよびその移動を、ひとまず「贈与」と呼ぶことにします。それは定義上、商品やサービスという「市場に登場するもの」とは異なるものとなります。

では、お金で買えないものは、どうやって手に入れたらいいのでしょうか。お金で買えないものは、どこから僕らのもとにやってくるのでしょうか？

そもそも、どうして私たちは互いにプレゼントを贈り合うのでしょうか。

うか。

誕生日、クリスマス、バレンタインデー、母の日、父の日、あるいは何かの記念日。

ほしいものがあるなら各々が自分で買えばいいのに、なぜか私たちはプレゼントという慣習を持っています。

プレゼントという慣習の理由。

それは、誰かからプレゼントとして手渡された瞬間に、(3)「モノ」がモノでなくなるからです。

もし自分で買ってしまったら、どれほど高価なものであっても、それはあくまでも「モノ」としての存在を超え出ることができません。どういうことか。

親しい人から誕生日に腕時計をプレゼントされたとしましょう。その腕時計がどこかのお店で購入されたものならば、それ自体はただの「モノ」にすぎません。この世界にただ一つしかない特別な時計などではなく、他の誰でも対価さえ支払えば購入できる、交換可能な「商品」ではありません。

ところが、その腕時計が「贈り物」として手渡された瞬間、事態は一変します。

たとえば、その時計を壊してしまったり、あるいは無くしてしまったりしたとき、僕らは何を感じるのでしょいか。

もらった相手にその事実を隠したまま、同じモノを自分で購入してそしらぬ顔でやり過ごす、というようなことはしないと思います。多くの人は、相手に対して申し訳ないと感じたり、「なんでもっと丁寧^{ていねい}に扱^{あつか}わなかったんだろう」とひどく後悔したり、落としたと思われ

る場所まで探しに行ったりするはずで。他人からすれば「たかが時計だろ？ 何十万円もするものでもないし」と思っても、本人にとっては非常にショッキングな出来事です。

もし仮に、まったく同じ型の時計をこっそり購入して、相手にそのことを黙ったままやり過ぐすとしたら、僕らの多くはその後ろめたさに耐えられないはずで。

プレゼントされた時計も、無くした後に自分で購入した時計も、モノとしては等価なはずなのに、僕らはどうしてもそう思うことができます。そこには、モノとしての価値、つまり商品としての価値からはみ出す何かがあると無意識に感じるのです。商品価値、市場価値には回収できない「余剰」を帯びると言ってもいいかもしれません。そしてその余剰が、単なる商品だったその腕時計に唯一無二性、言い換えれば固有名を与えることになるのです。

重要なのは、「その余剰分を自分自身では買うことができない」という点です。なぜなら、その余剰は誰かから贈られた瞬間に初めてこの世界に立ち現れるものだからです。

モノは、誰かから贈られた瞬間に、この世界にたった一つしかない特別な存在へと変貌します。贈与とは、モノを「モノではないもの」へと変換させる②ソウゾウ的行為に他ならないのです。

だから僕らは、他者から贈与されることでいか、本当に大切なものを手にすることができないのです。

「自分へのご褒美」という言葉の空虚さの理由がここにあります。

ご褒美は本来、誰かから与えられるものです。だからそれは買うことのできないもの、すなわち贈与なのです。

マイケル・サンデルは「(4) 経済学者は贈り物が好きではない。より正確に言えば、合理的な社会的慣行としての贈り物の意味を理解するのに苦労している」と述べています(『それをお金で買いますか』、146頁)。

経済学的視点に立てば、プレゼントを買ってはならない、現金を渡すべきだと結論づけられています。それは以下のような市場の論理から③ミチビかれるものです。

「人は一般に、自分の好みを最もよく知っている」という前提を認めるならば、他人がプレゼントを購入して渡した場合、支払った金額と同額のもを受取人自身が購入した場合よりも効用が必ず小さくなる。そして、そこに「プレゼントの目的は、その受取人を幸せにすること(受取人の効用を最大化することである)」という前提を付け加えるならば、プレゼントを買って渡すのではなく、使うはずだった現金を渡すべきであるということになる。

もらって困るもの、気持ちはありがたいが正直いらないものをプレゼントされることはたしかにあります。ですが、「正しいプレゼント、つまりプレゼントの正解は現金である」という主張は僕らの直感に反します。やはり贈与には、市場価値には回収できない何らかの余剰が隠されていると感じるはずで。

またサンデルは、お金で買えないものとして、「ノーベル賞」を挙げています。

たとえば、ノーベル委員会が毎年一つのノーベル賞を競売にかけるとしても、買われた賞は本物とは違うだろう。こうした市場取引は、ノーベル賞に価値をもたらす善を消し去ってしまう。ノーベル賞は名誉を表す善だからだ。それをお金で買ってしま

えば、手に入れたいと思ってる善は台無しになる。

(『それをお金で買いますか』、140頁)

サンデルは「善」と表現していますが、これも贈与によってもたらされる余剰の一形態です。そして、その余剰は買った瞬間にどこかへ消えてしまうのです。

当たり前ですが、ノーベル賞は買うものではありません。それは授与されるもの、贈られるものです。

お金で買えないものは、贈与として僕らのもとへやってくる。

お金で買えないものの一切は、誰かから手渡されることによって、僕らの目の前に立ち現れる。

さて、贈与の不可解な点はまだあります。

それは、(5) 贈り物はもらうだけでなく、贈る側、つまり差出人になることのほうが時として喜びが大きいという点にあります。

たしかに、自分の誕生日を誰にも祝ってもらえないとしたら寂しい。でもそれ以上に、もし自分に「誕生日を祝ってあげる大切な人」「お祝いさせてくれる人」がいなかったとしたら、もっと寂しい。

なぜもらうことよりも、あげることのほうがうれしいのでしょうか。なぜ自分が祝われる以上に、誰かを祝うことが自身の喜びになるのか？

恋愛の場面が一番分かりやすいと思いますが、気になる相手に何かプレゼントを渡そうとしたとき、受け取ってもらえないという悲劇が起こることがあります。

贈与の受取の拒否。

それは何を意味するかというと、関係性の拒否です。つまり「私はあなたと特別なつながりを持つつもりはない」という(4) センゲンとなります。

なぜ贈与がつながりを生み出すかというと、贈与には必ず返礼が続するからです。

「この前もらったお礼に……」

そのお礼はまたお礼を促します。そして、その返礼は再び贈与として相手に手渡され、さらに再返礼、再々返礼……と、その関係性は「贈与の応酬」に変貌します。

つまり、贈与を受け取ってくれるということは、その相手がこちらと何らかの関係性、つまり「つながり」を持つことを受け入れてくれたことを意味します。

こちらの好意や善意は、必ずしも相手に受け入れられるとは限りません。

だから、プレゼントを受け取ってくれたり、こちらの祝福を受け入れてくれたりしたとき、僕らはうれしく感じるのです。

(近内悠太『世界は贈与でできている』より)

※ターム……ことば。言い方。

問一 ―― 線①②③④のカタカナを漢字に直しなさい。漢字は一画ずつていねいに書くこと。

問二 ―― 線(1)「人間の新生児はなぜ未熟な状態で生まれてくるのでしょうか」とありますが、「人間の新生児」が「未熟な状態で生まれてくる」ようになった理由として最もふさわしいものを次のの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人類は直立歩行に適さない骨格であったが進化の過程で腰回りの骨格が小さくなり、女性の産道は狭くなった。同時期に、

人類は発達した脳を獲得し、子供の脳が成長前の未熟な状態で生まれてくるほうが、子育てにおいて社会的能力を役立てられたから。

イ 人類は歩行の方法が変化する途中で骨盤が小さくならざるをえず、女性の産道は狭くなった。それ以降、人類は大きな脳を獲得し、子供の脳が小さい未熟な状態で生まれてくるほうが、母子にとって自然な状況となったから。

ウ 人類は直立歩行を可能にするために全身の骨格を小さくし、女性の産道は狭くなった。またその頃、人類は脳が大きくなり、子供の頭が小さい未熟な状態で生まれてくるほうが、種の保存において合理的だったから。

エ 人類は直立歩行へと進化する際に腰周辺の骨格を小さくしなければならず、女性の産道は狭くなった。同時期に、人類は大きな脳を持つようになり、子供が頭部の小さい未熟な状態で生まれてくるほうが、母子にとってより安全だったから。

オ 人類は四足歩行からの脱却^{だつぎやく}によって骨盤が小さくなり、女性の産道は狭くなった。またその頃、人類は知能の発達した脳を携えるようになり、子供の身体が未熟な状態で生まれてくるほうが、母子にとって万全だと考えたから。

問三 — 線(2)「自然はそのような身体的拡張ではなく、社会的能力のほうを選びました」とありますが、それはどういうことですか。七十一字以上八十字以内で説明しなさい。

問四 — 線(3)『モノ』がモノでなくなる」とありますが、それはどういうことですか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア モノは誰かから贈られると、そのモノとしての性能とは別に

独自の機能が備わり、それまでにはない特別な存在となって、対価さえ支払えば購入できる市販品としてのモノではなくなるということ。

イ モノは誰かから贈られると、そのモノとしての存在を超える価値が突然^{とつぜん}生じ、交換不可能な存在となって、触^{さわ}ったり身につけたりできるような具体的なものではなくなるということ。

ウ モノは誰かから贈られると、そのモノとしての性質以外に個別の意味が加わり、かけがえのない存在となって、お金で買える単なる物理的なモノではなくなるということ。

エ モノは誰かから贈られると、そのモノとしての値打ちがいつそう高まり、唯一無二の存在となって、市場のどこにでも出回っている商品としてのモノではなくなるということ。

オ モノは誰かから贈られると、そのモノとしての価値とは異なる固有名がつき、世界中で他にはない存在となって、人類共通の普遍的な価値を持つモノではなくなるということ。

問五 — 線(4)「経済学者は贈り物が好きではない」とありますが、筆者はその理由をどのようにとらえていると考えられますか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の好みは自分が一番よく知っているはずであり、誰かがそれを聞いたうえで購入したプレゼントをもらうよりも、自分で何かを買うほうが主体的であり、市場の論理にも即^{そく}していると考え、経済学者にとっては、贈り物という慣行は意義のないものを感じられるから。

イ 自分の好みは自分が一番よく知っているはずであり、誰かが密^{ひそ}かに選んだプレゼントをもらうよりも、現金をもらって自分で何かを買うほうが当人も他人も幸せになり、経済的な効

果も高いと考える経済学者にとっては、贈り物という慣行は不条理なものに感じられるから。

ウ 自分の好みは自分が一番よく知っているはずであり、誰かにプレゼントとして何かを贈られるよりも、自分で欲しいものを選んで買うほうが速やかに品物が手に入り、無駄を省略できると考える経済学者にとっては、贈り物という慣行は効率の悪いものに感じられるから。

エ 自分の好みは自分が一番よく知っているはずであり、誰からプレゼントを贈られるよりも、現金をもらって自分で何かを買うほうが効用が大きくなり、喜びやうれしさが増幅すると考える経済学者にとっては、贈り物という慣行は形式的なものに感じられるから。

オ 自分の好みは自分が一番よく知っているはずであり、誰かが選んだプレゼントをもらうよりも、現金をもらって自分で何かを買うほうが当人の満足度は高くなり、理になつていいると考える経済学者にとっては、贈り物という慣行は納得できないものに感じられるから。

問六 — 線(5)「贈り物はもらうだけでなく、贈る側、つまり差出人になることのほうが時として喜びが大きい」とありますが、「贈り物」の「差出人になる」と「喜びが大きい」くなるのはなぜですか。四十一字以上五十字以内で説明しなさい。

問七 次のア～オは、この文章を読んだ後、「贈与」について話し合った生徒たちの意見です。このうち筆者の述べている「贈与」に関する理解として明らかな間違いを含むものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人類が未熟な状態で誕生するようになったことと、周囲の人

間と助け合う能力を発達させてきたことには関係があるんだね。四足歩行から直立歩行へと移行した太古の昔から、「贈与」が重要な意味を持っていたなんて不思議な感じがするよ。

イ 「食べ物を分けてあげる」「ありがとう、子供を見てあげるね」とか、そんな風に助け合っていたのかな。「他者からの贈与」と「他者への贈与」のおかげで人類がここまで命をつないできたなんて、考えたこともなかったよ。

ウ 「他者からの贈与」で手に入ったモノには「余剰」がある、だからどこかで買い直すことができないようなモノとなる、というのは、たとえば年の離れた妹が突然くれたドングリにもあてはまることだね。うれしくて、何となくお守りにして持っているんだ。

エ 「自分へのご褒美」という言葉はよく聞くね。けれど、そもそも自分で「ご褒美」を買っても「余剰」を帯びた特別なモノになることもないし、虚しいだけだ。自分以外の誰かが「贈与」してくれる「ご褒美」、欲しいなあ。

オ この間突然、手作りのチョココレートを「あげる！」って言われて、断り切れずに相手から受け取っちゃった。これって「贈与」とはみなされないよねえ。欲しくなかったけれど、相手の勢いに押されて、ついもらっちゃったんだ。



国語解答用紙

※らんには記入しないこと



合計得点	※
------	---

問二	
----	--

問四

問五

問六	
----	--

問七	
----	--

問二

問四

問五

❖

問七